

(体育科)

児童が運動の楽しさや喜びを求め、互いに学び合い高め合う体育指導

～「わかる・できる・かかわり合う」学習を通して～

大阪市立西三国小学校 馬場朋枝 福永千郷 高見望城 濱野知大

1. 研究主題設定の理由

本校は、本年度体育科の研究2年目となる。昨年度、児童が主体的に学習に取り組めるよう指導法を工夫してきたことで、実践後のアンケートでは「運動が好き」「体育が好き」と答える児童が9割を超えた。また、全国体力・運動能力調査では、男女とも総合得点は全国平均を上回っており、体力向上につながっている。一方で、自尊感情に関しては、実践後一時的に高まるものの定着までにはいたっておらず、依然として課題が残る。集団活動の場においても、自分の思いを極端に出す児童と臆してほとんど出さない児童と二極化している面があり、相互に相容れない人間関係の希薄さも窺える。そこで、児童が互いの個性を尊重し認め合う中で、より強い人間関係を形成し、体育学習における体力向上と人間関係形成の発展とがスパイラル的に高まっていくという相乗効果をめざし、研究を進めたいと考えた。

2. 研究の趣旨

本研究における「わかる」とは、目標であるその運動のコツやポイントをとらえ、自分の実態を踏まえた上で、試行錯誤を繰り返しながら自分の課題を設定することである。そのためには、児童自身の適切な課題把握や、効果的なふりかえりが必要である。「できる」とは、新しい運動ができるようになったり、今できる運動がより上手になったりすることである。そのためには、基本的な動きを獲得し、定着を図った上で、動きの質を徐々に向上させていく必要がある。この「わかる」と「できる」は、相互に関連し合っていると考える。さらにこれらを相乗的に引き出すものが『協働する集団』である（「かかわり合う」）という仮説を立て、研究主題を設定し、実践を進めた。

体育科としては授業研究に取り組む領域を「ボール運動系」「器械運動系」の2領域に絞り、発達段階に応じ系統立てた研究として深めた。また、自他を互いに認め合うことで豊かな人間関係を醸成し、体育科の授業だけにとどまらない日常生活の動きにつながる研究を重ねた。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

ア. めあてのめたせ方を工夫する

【学習資料 学習カード ICT 学習過程の工夫 単元導入の工夫 ふりかえりなどで検証】

イ. 場の設定や用具を工夫する

【グループ編成 課題別グループ編成 表現の場・交流の場 ICT コートなどで検証】

ウ. 活動意欲を高める評価のあり方を工夫する

【指導者の支援 ICT 自己評価・相互評価 友だちとの意見交流などで検証】

児童と指導者、児童相互のより強いコミュニケーション、話し合い、学び合いといった点に重点を置き、さらなる動きの工夫や発展につなげられるよう努めていく。

また、本年度は継続的に運動する環境を整え、運動の日常化・生活化を図ることが目的でもある。体育科の授業で学んだことを日常化・生活化していくための工夫を図る。

遊具等を使った遊びを奨励したり、児童会と協働した「なわとび大会」や「ドッジボール大会」などの体育行事をはじめ、たてわり班による集会活動などの場も活用したりすることで、体を動かす楽しさ、できるようになりたいと思う心をさらに育めるようにする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

わかる

- ・単元導入時にはオリエンテーションを行い、学習の進め方やカードの使い方等を確認することで見通しをもって活動に取り組むことができた。また、学習の流れやルール、運動のポイント、対戦表等を常に掲示することで、視覚的な手立てとなり、児童が主体的・自主的に活動できた。
- ・児童の実態に合わせて作成した学習カードやチームカードを活用することで、個に応じためあてや課題を意識したり、チームの課題に合わせた練習を工夫したりすることにつながった。また、赤白帽を活用して、ルールやめあてを意識しながら活動できるようにした。
- ・タブレット PC や大型モニター等の ICT 機器を活用することで、動きのイメージをつかんだり、自分の課題を意識したりすることができた。
- ・コート等のポイントを打つことで、児童が自主的に準備できた。

できる

- ・技の習得につながる感覚づくり運動を意図的に取り入れたことで、基礎的感覚・基礎的技能の習得につながった。
- ・スモールステップの場を工夫したことで、技能が高まっていくことを実感しながら試行錯誤する姿が見られ、動きの質を徐々に向上させていくことができた。

かかわり合う

- ・全員が参加するためのルールの工夫を考えることで、教え合い励まし合い、協力し合って活動できた。
- ・作戦タイムやふりかえりの時間を確保したことで、お互いのよさや課題を伝え合うことができ、より質の高い技能、思考・判断、態度へと高めていくことにつながった。

全学年で「体育科における言語活動の可能性」を探り、互いの学び合いを大切にしてきたことで、子どもたちの自尊感情や他者理解を高めることにつながった。苦手なことに対しても粘り強く取り組もうとする姿、試行錯誤の繰り返しに熱中する姿、友だちのがんばりを温かく励ます姿、勝ち負けにこだわりながらも結果を肯定的にとらえようとする姿から心の成長も感じられた。

本研究では、課題の大きい児童や苦手意識をもつ児童を中心に据えた授業づくりを意識してきたことで、体育学習における体力向上と集団育成の両面において、大きな成果を得ることができたと言える。

(2) 今後の課題

○技能面に関する指導力の向上

- ・技とのつながりを意識した感覚づくりの運動の精選
- ・ボールを扱う時の基礎・基本的な動きの知識や指導方法の習得
- ・低学年からの系統的・段階的な指導
- ・上達につながる声かけのありかた

○主体的な学びを引き出す手立てや教具のさらなる工夫

- ・ICT の効果的な利活用
- ・運動あそびの日常化